

戦前、戦後を日本に生きたロシアの舞姫、オリガ・サファイア —国際的な文化理解のために—

佐藤俊子

目的：世界が平和ならざる困難な時代を、ロシアと日本に生きた舞姫オリガ・サファイア（1907ペテルブルグ—21981東京）について、戦後50年という節目の年に改めて思い起こし、概して国際的な文化理解がどこまで可能なものかを再考してみたい。

方法：オリガ・サファイアをとりまく、かなり異常な時代環境および舞踊環境に関するリサーチの上にオリガを位置づけ、オリガが日本に生きた45年間に何をなそうとしたか、どこまで成しえたか、等々、一応平和と言われる現在においてなお決して容易ではない国際的な文化理解の問題と合わせて検討してみたいと思う。

《時代環境》 オリガ・サファイアがロシアに暮らした29年間（1907—1936）は「寒さも、また飢えも」の標語で知られるつらい時代であった。7歳で第1次世界大戦、10歳でロシア大革命、青春を被ったのはドイツのヒトラーに劣らず悪名高いスターリンの大粛清時代、日本人とつきあっただけでゲ・ペ・ウ（ソビエト連邦の秘密警察）に狙われるという殺伐な時代であった。ふと見つけたオリガの若き日の写真、裏には夫君にあてて「死ぬまで愛します」と綴られている。美しいロマンスとも受け取れるが、当時はたえず死の影に脅えていたのかもしれないと思う。「人間にはいつ、なにが起こるかわかりません」という緊張に満ちたことばを、筆者は彼女から何度も聞いた。

来日は1936年5月、2・26事件のわずか3ヵ月後、すでに軍部の政治干渉は強まっていた。1937年には日中戦争突入、1939年には第2次世界大戦、1941年には太平洋戦争と続く暗い時代であった。夫君の清水威久は「オリガが日本に来たのは、異常なソ連内および国際的な状況のためだった」と明かした。一度も里帰りも許されず、肉親との文通もならず、その生死すら知るすべもない長い年月であった。

《舞踊環境》 第1次世界大戦、ロシア大革命と続いて帝政が崩壊したとき、その伝統を誇った帝室劇場および帝室舞踊学校にもさまざまな変化がもたらされた。ただ両者とも国立に移り、消滅をまぬがれたのは幸いであった。しかし、ロシア・バレエを長年にわたって築き挙げたプティパはすでに亡く、フォーキン、バヴロワ、ニジンスキー、カルサピナらは、ディアギレフの企画に

つれられて西欧へ移動を開始していた。演目も一時は、プロレタリア革命を成し遂げた新体制に、ハンサムな王子や美しい王女が主役のグラン・バレエはふさわしからぬものと排除され、『ジゼル』、『白鳥の湖』、『眠りの森の美女』などが一斉に姿を消した時期もあった。それらと入れ替わりに『パリの焰』、『バフチサライの泉』、そしてオリガもよく踊った『赤いけし』のような新しいソビエト・バレエの創造の時代が現出したのである。

オリガがバレエを開始した頃はまさしく激動期であり、舞踊学校の閉鎖や合併が相つぎ、オリガ自身、3度も学校が変わった。しかしふしぎなことに、あるいは激動期だからこそなのか、彼女の周辺には少なからず歴史的な大物を見出すことができる。列挙するに留めるが、『歓喜の書』で知られるヴォルインスキー、オリガの教師であり、その後モスクワのバレエ学校設立の折には初代校長となったヴィクトル・セミョーノフ、ワガノワ学校にその名を残したワガノワ教授、オリガの同級生には日本公演でも主役を踊ったプレオブラジェンスキーやセルゲーエフ、ウラノワ主演の映画『ロミオとジュリエット』のマキューシオ役で有名なコーレニ、バレエ指導で来日したチャブキアニ、『パリの焰』を振り付けたワイノーネンと枚挙にいとまがない。ロシアはもとより世界でも最高の誉れ高い国立舞踊学校出身者であるという誇りを、オリガは終生持ち続けた。

国際的な文化理解（結論にかえて）：この夏、筆者はランゲージでは名声高い米国のミドルベリ大学で過ごした。今年はこの日本語学校の創設25周年で「日本研究」の特別シンポジウムが開催され、これにかかわる全米の学者がミドルベリに集合した。筆者の仕事は彼らのために日本文化紹介の舞台を作ることであった。日本研究にふさわしく「歴史が語る日本の舞踊と音楽」と題し、日本史に沿いながらバレエは無論のこと、能や日本舞踊からも演目を選び、その間に日本の旋律を配置した。ロシア人に学んだバレエが原点となり、アメリカの地で、しかも日本文化を伝達するという、文化が国境を越えて飛翔するような仕事できたこと、さらにダンサーとしては古典バレエの軸のとり方ひとつで、様々な舞踊の形式に無理なく違和感なくとびこめるという実体験を得たこと——これらすべてを筆者はオリガに感謝した。そして久しい以前に聞いたオリガの「今は古典をしっかり学びなさい。古典をしっかり学べば、あとはどんな舞踊も踊れます」という警告を改めて思いだした。ある言語学者は「バイリンガルの養成は容易だが、バイカルチュアは絶対不可能だ」と言い切った。筆者としてはオリガを思い浮かべながら「それは人次第ではないか」と答えた。